

子どもにおける「自己」の働き —20世紀心理学史の回顧と 発達心理学研究の展望を踏まえて—

宮本浩紀

Hiroki MIYAMOTO

はじめに

心理学が哲学から独立を開始して一世紀ほどが経とうとしている現在、あらためて20世紀心理学史を回顧するならば、心理学者たちによって相対立する人間観が提示されてきたことが思い起こされる。それはすなわち、人間を周囲の環境に対して受動的な存在とみなす立場と、逆に多分に能動性を有した存在とみなす立場の対立である。もちろん、ここでは議論を簡潔にすべく、このように極端な二項対立を設定したわけであるが、過去に出された心理学研究をこれら二つの立場のもとに整理することには一定の意義があると言えよう。というのも、これら二つの立場は過去の心理学史において“遺伝—環境論争”や“人間—状況論争”など、時と所を変えつつ長らく議論的とされてきたものだからである。周知のとおり、古くは遺伝説と環境説を折衷した輻輳説やその発展型の環境閾値説などを通じて論争自体は大部分決着を見ているところであるが、ここで注目したいのはそれらの論争において縷々提示されてきた人間観である。輻輳説のように、人間をただ単に遺伝と環境それぞれの影響を受ける受動的な存在とみなすのか、あるいはゲシュタルト心理学のように、人間を周囲の環境を自覚的に捉え、それ自体に変化を及ぼす能力を有した存在とみなすのか、そういった研究の前提にある人間観を把握することは、研究方法や研究対象の正当性を考察する前提となる作業であるといえる。

本論文は、そのように相対立する人間観が顕著に見出される20世紀心

心理学史に焦点を定めた上で、その論争の中心概念として認められる「自己 (self)」¹ (あるいは主体性を有した人間観) の働きについて検討するものである。19世紀末、実験心理学の祖とされるヴント (Wundt, W. 1832-1920) によって、「意識」や「学習」など心理学的研究方法で把握することのできない能力が研究対象から除外されたにもかかわらず、その十数年後、フロイト (Freud, S. 1856-1939) らによる精神分析学や、ケーラー (Kohler, W. 1887-1967) やレヴィン (Lewin, K. 1890-1947) らによるゲシュタルト心理学、さらにはトールマン (Tolman, E. C. 1886-1959) やハル (Hull, C. L. 1884-1952) らによるいわゆる新行動主義心理学において、主体性を有する人間観が想定された背景にはいかなる理由があったのか。本論文は、以上のような問題関心のもと、一度は心理学の研究対象から除外されようとしていた「自己」概念を想定することの意義、あるいは直接的には「自己」概念を明示せずとも主体性を有した人間観が想定されたことの意義について検討するものである。

以下、本論文では、まず第一節において、20世紀心理学史の三大潮流とされる精神分析学、ゲシュタルト心理学、新行動主義に関して、「自己」の働きに焦点を定めたまとめを行い、同概念を想定する意義と課題について論じる。続く第二節では、そのような見解の是非について検討するべく、子どもにおける「自己」概念成立に関して発達心理学の知見を参照するとともに、その総括として「自己」概念研究の意義と課題について論じる。以上のように、20世紀心理学史の内容を回顧しつつ、今後の「自己」概念研究の展望について考察することが本論文の主たる目的である。

1. 20世紀心理学史の回顧

(1) 三大潮流における「自己」概念の位置づけ

本節では、20世紀心理学史の三大潮流とされる精神分析学、ゲシュタルト心理学、新行動主義において、「自己」の働きに焦点が当てられた経緯及びそ

の意義についてまとめを行う。

①精神分析学

周知のとおり、精神分析学の主唱者として、まず第一に 19 世紀末から 20 世紀初頭のウィーンで活躍したフロイトの名があげられる。フロイトが臨床医として仕事を開始した 19 世紀中庸のウィーンでは、器質には何の異常もみられないにもかかわらず日常生活に支障をきたすような神経病を患っている人々が数多くいたという。しかし多くの医師がそのような人々に接する機会を有していたにもかかわらず、当時の医学会においては、主として視覚的に把握することのできる身体的部位の治療を行うという方針から、神経病に関する治療が積極的に実施・研究されない状況が続いていた（福島，1977、浜川，1978、上山，1989）。

多数の医師たちがそのような神経病の患者に医学的処置を行うことを避けていたなか、フロイトはどうかしてその病を治療することができぬものかと考え、様々な治療を試みたという。その過程でフロイトは、患者が催眠によるリラククス状態において医師の質問に自由に応答する「自由連想法」を確立し、その後の精神分析学が発展する礎が築かれることになった。フロイトによって開発された自由連想法の核心は、ひとえに患者に患者自身のことを語らせ、その語られた内容をもとにして医師が共に神経病の原因を探ろうとした点にある。すなわち、従来ならば医師の治療を受ける〈従〉の位置におかれる患者を、医師と共に治療の過程に参加する〈主〉の位置に置いたこと、治療場面における患者の役割に関して〈主〉の側面を見出したことが大きな違いであった。

そのように位置づけの変更がなされた経緯としては、フロイトが治療場面において神経病を患う様々な患者と接触したことはもちろんのこと、彼自身の経験も多分に含まれていたという。すなわち、フロイト自身もまた自らの幼少期の体験や夢の内容などを分析することにより、人間に一定程度共通してみられる病の原因を見出していったわけである。そのような臨床場面における経験を

もとにして、フロイトは人間の有する視覚的には捉えることのできない領域として「意識 (Bewusstsein)」を想定し、そのような意識を有する統合的な機能として「自我 (ego)」を想定するに至った²。「自我」の機能に関して、フロイトは次のように述べている (Freud, 1970)。

われわれは、個人の精神過程の脈絡ある一体制を考え、それを自我と名づけた。意識は、この自我に結合しており、運動機能への通路、すなわち、外界に亢奮が排出される通路を支配している。それは精神の法廷であり、精神のあらゆる部分過程の調節を行ない、夜になると眠りにおちるが、それでもたえず、夢の検閲をつづけている。抑圧もこの自我から生じ、それによって精神のある傾向は、意識から閉め出されるだけでなく、他の種の価値や活動からも閉め出されるにちがいない³。

この引用箇所には、「抑圧 (Verdrangung)」や「エス (es)」など、フロイトの精神分析学における中核概念が複数示されているが、その詳細な検討に関しては他を参照することとし (Freud, A. 1936)、ここでは、自我の機能とそれを取り巻く諸構造を確認しておく。すなわち、以上の引用部分のうち本論文が注目すべきことは、第一に、「自我」が人間個人のうちにある“体制”として想定されていること、第二に、その「自我」と結合した意識によって、自らの精神にあらわれる諸事象が取り扱われていること、という二点である。

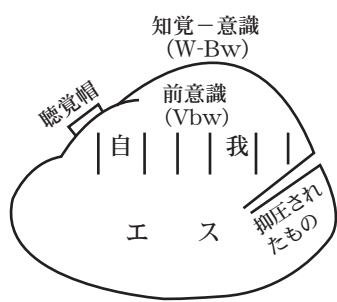


図1 人間の精神構造
出典) S. Freud. (1970). Freud 著作集
第6巻 岩波書店

このことから、佐治 (1971) が述べているとおり、自我が「外界と内界との境界に存在し、知覚し認知しまた行動する広範な機能」を有していることが

理解される。以上をまとめるならば、フロイトの精神分析学における「自己」概念が、個人の外部の事象を受けとる受動性のみならず、そのように受容された事象にもとづいて自らの体制を定める能動性も有していることが確認できよう（図1参照）⁴。

②ゲシュタルト心理学

フロイトによる精神分析学より遅れること十数年、ドイツを端緒として後にアメリカにおいて興隆した心理学説としてゲシュタルト心理学があげられる。ゲシュタルト心理学は、ドイツの心理学者ウェルトハイマー（**Weltheimer, M. 1880-1943**）によって創始された後、ケーラーやレヴィンらによって主導された心理学的研究の総称であり、ヴントが創始した実験心理学における“要素還元主義”を批判する点に主たる目的があった⁵。ケーラーらは、心理学を物理学や化学と同等の厳密な手続きに基づく学問とするために当時の方法で扱うことの難しい領域（例えば、「意識」や「学習」や「知覚」）を研究対象から除外したヴントの研究を問題視し、主に人間のもつ「知覚」に関する能力に新たな側面が存在することを主張したわけである。その主張の根幹は、人間の能力はAの作用やBの作用といった個々別々の要素の機能に分離したものとして把握できるわけではなく、個々の要素が結びついた全体的な関連性のあるものとして把握する必要性を示す点にあった（柿崎, 1971）。そのようにゲシュタルト心理学の主張の根幹が要素還元主義に基づく心理学説の誤りを指摘する点にあったため、その論敵はヴントによる実験心理学説の他、次項で取り上げる行動主義心理学までも含むこととなった。

「自己」概念の働きについて主たる検討を行う本論文では、その後ゲシュタルト心理学において、初期の研究者であるケーラーらとは異なる視点をもつ研究者が現れ始めたことに注目したい。そのような研究者の代表的存在はレヴィンである。レヴィンは、基本的にはゲシュタルト心理学の立場に立ちつつも、他の研究者と一線を画す形で、人間の行動を個々バラバラのものではな

く、環境との相互作用の産物であるという認識をもつに至った。すなわち、その主著である『パーソナリティの力学説』に記されているとおり、人間の行動 (behavior) を人 (person) と環境 (environment) の産物と捉え、 $B = f(P, E)$ という関数を提唱したのである。後にこの式の精度を高めるべく、人間を含む環境を「場 (field)」と規定し、その成立状況に関する考察を行ったことが特徴的である (「場の理論 (field theory)」)。このように、様々な人に共通する行動を見出すべく数学的方法を取り入れたことに加えて、それまで主に知覚を研究対象としていたゲシュタルト心理学において人間の行動にも焦点が当てられたことは、新たな視座が見出されたことを物語る⁶。以上のように、ゲシュタルト心理学が「個々の事実がそれ自体として単独に意味をもつものではなく、その背景を含めた全体との関係において初めて特定の意味をになう (柿崎, 1971)」という認識を有していた点から、同領域における研究が人間のもつ主体的な働きを考慮に入れる余地を有していたことが確認できるだろう。

③新行動主義

最後に、新行動主義について取り上げることにするが、その前提として行動主義の考え方について確認しておく必要がある。行動主義もまた、先に取り上げたゲシュタルト心理学と同様に、ヴントによって創始された実験心理学の研究方法に対する批判として生み出されたものであるが、ヴントの掲げた方針をさらに徹底させるべく「意識」といった言葉を一切用いない立場をとった点で、ゲシュタルト心理学とも方向性が異なる。このことは、行動主義の主唱者の一人であるワトソン (Watson, J. B. 1878-1958) によって発せられた以下に示す有名な宣言に表れている。

行動主義者の関心は、人間の行うことに向けられているが、彼の関心は思弁家の関心以上である。行動主義者は、物理学者が自然現象を支配し、操作するように、人間の行動を支配したい。人間の活動を予言し、支配す

ることは、行動主義心理学の仕事である。これを行うためには、実験的方法で、科学的なデータを集めなければならない。そのときはじめて、訓練された行動主義者は、この刺激を与えれば、どういう反応が起るかを予想できるし、またその反応を告げれば、どういう状況、あるいは刺激がその反応をひき起こしたかをあてることができる⁷。

このような立場に立って、人間の行動を予測できる理論を打ち立てようとしたワトソンが、実験対象を視覚的に捉えることのできる人間の行動に限定した上で、しかも行動が成立する仕組みを「刺激 (Stimulus)」と「反応 (Response)」の組み合わせによって明らかにしようとしたことは周知のとおりである。ワトソンの業績は、ロシア人生理学者パブロフ (Pavlov, I. P. 1849-1936) らが行った生理学的な反応に基づく研究に加えて、「学習」にまで行動主義的な考え方を適用した点があげられるものの、このような極端な考え方は後に行動主義の立場を受け入れる研究者からも修正的な意見が出され、結果的に次に見るような新行動主義と呼ばれる考え方が提唱されることとなる。

ワトソンの考えを修正しようとした新行動主義の立場に分類される研究者として、トールマンやハル、スキナー (Skinner, B. F. 1904-1990) などがあげられる。実験における生物体の身体的な反応に注目する行動主義者ワトソンの考え方とは異なり、新行動主義者たちは、人間ないし動物が環境に適応する有り様を全的に捉えようとする。すなわち、生物体による環境への適応が主題に掲げられている点から明らかであるように、新行動主義では、S-R という図式ではなく、刺激 (S) と反応 (R) の間に生体 (Organism) を位置づけた S-O-R という図式が描かれているのである (Woodworth, 1929)。

以上が新行動主義の概要であるが、実際には一括りに新行動主義といってもその中で様々な考え方が提示されており簡単な説明で済ますことは不可能である。そこで、ここでは人間のもつ主体的な働きの可能性に顕著に注目した研究者としてトールマンの考え方を取り上げておく。トールマンの主張の根幹は、

個々の環境及び個々人を分析対象とするにあたって、様々な仲介変数を設定した点に認められる。とりわけ個人差を示す変数として、「遺伝(H)」、「年齢(A)」、「以前の訓練の結果(T)」、「特定の内分泌的な条件、あるいは薬物やビタミンの条件(E)」という6つの項目があげられることにより、刺激と反応の仲介を成す個人を詳細に把握しようとする立場がとられたことが特徴的である(末永, 1971)⁸。行動主義の祖であるワトソンは、あらゆる生物体に認められる刺激と反応の結合過程を研究対象としていた以上、トールマンのように個々の生物体の抱える諸条件に対しては注意を払わなかった。そのことに鑑みるならば、以上取り上げたトールマンのように心理学において個人を具に把握しようとする立場があらわれたことは大きな研究上の変化であったと言える。

(2) 「自己」をめぐる諸問題

以上のように本節では、20世紀心理学史における三大潮流とされる精神分析学、ゲシュタルト心理学、新行動主義における「自己」の働き及び人間の主体性について検討してきた。最後に、「自己」という機能概念を想定すること自体にいかなる諸問題が見出されるかについて検討しておきたい。以下、パーソナリティ心理学者(人格心理学者)であるオルポート(Allport, G. 1897-1967)の主張を取り上げる。オルポートは、『人間の形成(*Becoming*)』という著書の中で、20世紀心理学史における実証主義的な研究方法の排除と復活の過程について述べた上で、次のような言葉を記す。

しかし、そこには、依然として、ヴァントが回避しようとのぞんだ危険が、すなわち、個我を、急場を救うために使うあの常套手段にする危険が、〔つまり〕自我を、実証主義がそれに失敗したあげく、びくびく動いている心理機会のばらばらにされた部分をもういちど寄せあつめるために呼び求める天佑神助にでっちあげる危険が、のこっています。今日の状況は、最初、パーソナリティを一組の外的な対位物に合わせた多くの心理学者たちが、

その結果に満足していない、という事態だと思われます。それで、かれらはまたもや自我を案出したわけです。…同じように、心理学でも、経験論者たちが、その分析の道具でやり得るかぎりのことをやったが、その結果が不満に終わったのを見出して、その先輩たちがやったように、自分たちの断片的な描出のなかでとり失ってしまったことを知った一貫性、統一、および目的具有性を表出するために、どんなに不適當であるにしてもある種の個我概念にうたえる、という事態にはまりこんでいます。

引用箇所を読んですぐさま、オルポートが安易に「自己」概念を想定し使用することに懸念を表明していることがうかがえる。だが引用箇所以外の記述から見出される結論を踏まえるならば、最終的にオルポートは同概念の使用に対して完全に否定的な立場を示そうとしているわけではない。「問題は、科学の進歩をおくらせるよりもおしすすめるようなやり方で、自我概念の復活に導いた現象に、どのようにしてせまっていくか」¹⁰という言葉に表れているように、手放しで「自己」概念を想定することの問題点を目を向けようとしているわけである。以上のような懸念事項に関して、結局のところオルポートは「個人にとって重要である事柄」を心理学〔とりわけ自我の心理学〕の対象とすべきであると主張し、「プロプリウム (**proprium**)」という概念¹¹を提示している。プロプリウムとは、個々人のパーソナリティの内的統一を助長するあらゆる側面を包括する機能概念として想定されたもので、断片的な経験や数学の方程式にもとづいて人間を研究しようとする心理学一般とは異なる旨が表明されている。

オルポートはまた、「自己」を想定することの是非に関して、次のように述べている。

われわれの主張はこうである。出生にさいして、われわれは一個の有機体（もしくは、個体）として出発する。この有機体は、環境に適応し、ま

た環境を征服する独自の方式を発展させる。これらの方式が、パーソナリティを構成する。初期の方式はプロプリウムの機能をふくみ得ない。が、二才もしくは三才までにはそれをふくみはじめる¹²。

管見の限り、ここで示された内容に関してその後オルポートが発展的な考察を行っているようには思われませんが、ここには重要な視点が提示されているものと考えられる。それは、人間の年齢に着目した発達心理学的な視点が見出されている点、それもとりわけ二才もしくは三才という比較的低年齢の時点において個々人のパーソナリティがプロプリウムの機能をもつに至ると述べられている点である。ここで示されている年齢区分や、その発生の仕組みに関して根拠となる研究成果は示されていないものの、発達心理学の視点を踏まえることによって垣間見える視野が示唆されている。今日、発達心理学の研究はめざましく、オルポートによる研究以後、新たな知見が續々発表されている。そこで、次節において、このオルポートの見解を端緒として、発達心理学の知見から「自己」概念を想定することの意義及びその是非について検討していくこととする。

2. 「自己」概念を想定する意義・是非

(1) 子どもにおける「自己」成立の仕組み—柏木恵子氏の論考をもとにして—

本節では、発達心理学の知見をもとにして、「自己」概念を想定する意義及び是非について検討していく。これまで発達心理学において、子どもの「自己」概念の在り様を解き明かそうという研究は数多く行われてきた。以下、その代表的研究として位置づけられる柏木恵子氏の主著の一つ『子どもの「自己」の発達』を参照することにより、同テーマに関する検討を行っていく。

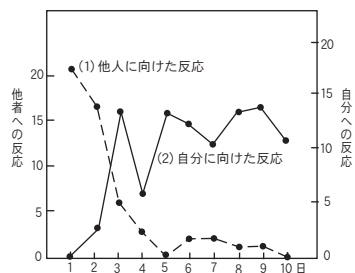


図1 鏡の前で示す反応の消長
(Gallup, 1977)
出典) 柏木 (1983)

人間は他の多くの動物のように誕生して比較的短時間のうちに一人で生を営むわけではない。その最初期には基本的には母親と一体のものとして日々を過ごしていく。そのように母子の関係が密接であることによって、「誕生という母子分離が実際生じたにもかかわらず、赤ん坊には、しばらくの間“自分”というものが他とは別個な存在である、とは受け止められてはいない」¹³という事態が生じるものと推察される（柏木，1983）。

だが、そのように“自他未分化”の状態も実際にはそれほど長くは続いていないことが研究を通じて明らかにされてきた。よく知られた調査方法として、鏡の前における子ども（動物行動学の場合ではチンパンジーなども）の反応を確かめるといふものがある。図1は、ギャラップ（1977）によって行われたチンパンジーを対象とした自己鏡映認知の実験である。これによると、図1より、鏡に他人が映った場合（“他人に向けた反応”）と自分が映った場合（“自分に向けた反応”）とを比べた場合、観察期間がのびるにつれて実験対象であるチンパンジーにおいて、次第に“他人に向けた反応”が減っていくことが確認できる。これは、チンパンジーが、自分の行動と一体のものとして表れる“自分に向けた反応”の方により興味を示すこと、すなわち、自らの身体動作と認知のつながりの方により強い興味を持ちつづけることを示している。現在の研究状況では、人間と動物を直接比較することはできないという立場が主流であるので、あくまでもこのギャラップの実験はチンパンジーにおいて自と他が区別されていることを示す一つの証拠としか見なせず、人間の子どもの類推をかき立てるものでしかないが、人間の子どものにおいても同様の事態が認められることは縷々報告されている¹⁴。

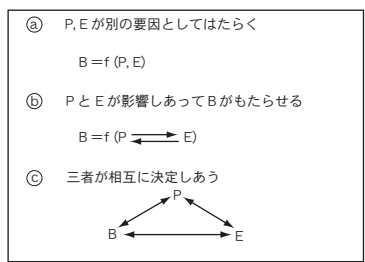


図2 Banduraによる自己システム論
 出典) 柏木 (1983)

人間は哺乳類の中でも母子の密着期間がとりわけ長い生き物である以上、生

後まもなくの時点で見られる自他の区分が、母子が一体となった養育環境の中で生じていくことは言うまでもない。柏木氏は上記の他に、主として欧米圏における子どもの自他認知研究として、「自己」概念の成立や自己評価・自己感情、あるいは行動制止機能の一例として「罰の働き」や「言語による統制」を紹介している。二十世紀心理学史における「自己」概念の表れに注目した本論文としては、現代の「自己」概念研究において欠かすことのできない研究を行ったバンデューラ (Bandura, A. 1925-) による“自己システム論”に着目したい。先に、新行動主義における S-O-R 図式を提示したが、バンデューラは図 2 のように「自己」を中核に据えた図式を提唱している。図 2 のポイントは、人間の行動 (B) が個々人のみによってなされているわけではなく、外的環境 (E) との相互作用で成り立っていることが示されている点にある。バンデューラによる自己システム論に関して、柏木は以下のような説明を行っている。

直面した場面や課題に応じて自分の行動のある側面 (たとえば能力、性質など) について観察し、過去の経験や他者の成績、自分のもっている目標、期待などに照らして評価を下す。この自己への評価——価値づけ、感情的判断などが次の行動のとり方—方向、内容などを規程してゆく。つまり、自己システムの機能、あるいは自己影響性 (self-influence) とは、行動に意味や価値などを与え、次の行動を統制してゆく諸過程であるが、なかでも、個体が自己をどのくらい有能とみなしているか—有能感 (sense of personal efficacy) —は、その個体の行動の中心的な決め手だと強調されている¹⁵。

この引用箇所の核心は、個体の行動を決める正否は、個体が有する“自己有能感”にあるという点にあるが、本論文ではもう一つ別の点に注目したい。すなわち、柏木が説明しているように、バンデューラの理論において、人間の行動は単に環境との相互作用とみなされるのではなく、その当事者である人間の

内面が多大に関与していると想定されている点が重要である。人間の行動が外部からの刺激によって機械的に規定されるものではなく、多分に各人の自己システムに基づいていることが踏まえられていることは、「自己」概念を想定する意義を示すものといえる。以上のように、誕生間もない頃から「自己」を認知していると思われる子どもが、その発達の過程においても、「自己」を主軸とした環境への適応及び環境の改変を行っていく仕組みが示されたことは大きな意義を有していると言えるだろう。

(2)「自己」概念における新たな視座—浜田寿美男氏の見解をもとにして—

最後に、「自己」概念を想定する是非について検討するべく、発達心理学者の浜田寿美男氏の論考を取り上げたい。浜田氏は、季刊『発達』に長期連載された原稿を複数の著書としてまとめている。今回取り上げるものはそのシリーズの第一冊目である『発達心理学 再考のための序説』に収録された一節である。同書のある箇所において、浜田氏は新行動主義の考え方（**S-O-R** 図式）を紹介した上で、「先の **S-O-R** 図式に対比して言えば、 $\boxed{O} \leftrightarrow \boxed{O}$ という主体と主体との間（関係）に光をあてた理論化を試みないかぎり、人間の現象、とりわけ人間の意味世界のありさまは見えきません」¹⁶と述べる。これは、新行動主義を通じて提示された **S-O-R** 図式に見出される課題を指摘したものと理解できる。**S-O-R** 図式が **S-R** 図式を修正したものであることは先に確認したとおりであるが、浜田氏はその修正版にも課題を見出したわけである。すなわち、主体性を有した **O** と **O** の相互作用にまで視野を広げない限り、人間の在り様は見てこないというのである。これは一体どういうことであろうか。以下、一人の人間が発達するプロセスにおける人と人との関わりの重要性を指摘する浜田氏が、子どもにおける「自己」の形成について述べた箇所を検討してみよう。

現に、子どもが生まれて最初にとり結ぶ人間関係は、大人との関係であって、およそ対等のものではありません。言いかえれば、大人—子どもと

いう自他関係は、そうした非対等なやりとり関係を、子どもの内に生み育てることになるはずでず。つまり、子どもは自分なりの思いで自らの行為や言葉を表現しますが、その意味は現実の大人の意味づけによって大きく左右されます。そうだとすれば、子どもたちが生まれてからその育ちのなかで作りあげる自我そしてその生活世界のなかには、周囲の人たちとのやりとり、周囲の人たちが与える意味づけ（あるいは物語）が、これと分からぬかたちで浸透していることとなります。

一定の自我を形成し、自分の世界を形成して、自分はこの世界をこうして生きているのだという〈自我—世界〉観をもちえた段階では、他者からの意味づけ、理解が歯止めなくむやみに浸入することはないでしょう（少なくとも意識のレベルでは）。しかし、それ以前の子どもたちにとってはどうでしょうか。そこに自我形成上の基本的な問題があることは明らかです¹⁷。

この引用箇所において最も重要だと思われる箇所は、人は年齢が低ければ低いほど、自分の周囲にいる他の人の影響を大きく受けており、（意識されることなく）その周りの人々によって自我の意味づけがなされてしまうと述べられているところである。これは、先に柏木氏の研究を参照した際にも得られた理解と重なるものである。人がまさしく一人で生きているわけではないこと、それも衣食住といった物理的な事象に加えて、自我の形成過程そのものにも他の人が参与していることを考えるとき、幼少期が個人の人間形成に与える影響の大きさを痛感せずにはいられない。佐治（1971）がフロイトの説を評して「超自我の圧力には、われわれが良心とよんでいる、周知の意識的な経験が含まれている。この機能は、あたかもわれわれの中に別の他人がいるかのような感じをおこさせる」¹⁸と述べたことは、「自我」が自らを律する他人のように振る舞うという意味を示しているわけだが、浜田氏の見解を踏まえるならば、文字通り人は幼少の頃から、その「自己」概念のうちに他の人の自己を含んでいるこ

とが気付かれる。

このように考えてみるならば、「自己（自我）」を想定することに一定の意義があること、さらにはそのように「自己（自我）」を想定することにより、逆に人が（たとえものごころついた後であっても）自分一人だけで成り立っているわけではないという視座が獲得されることになる。以上のような視座が得られたことは、今後一人の人間の在り様を具にみていく上で実りあるものであったといえる。

おわりに

以上のように、本論文では、「自己」概念を鍵概念として、20世紀心理学史の回顧及び同概念を想定する意義と是非の検討を行った。先に述べたとおり、発達心理学研究の知見を参照することにより、かつては個々別々の一人の人間によって構成されるものと捉えられていた「自己」が、実際には人間の誕生間もない時点における周囲の人々との相互作用を通じて成立するものであることを認めるに至った。そのように、異なる身体・精神をもつ他人が「自己」に与える影響（浜田氏の論を参照）、あるいは一人の人の中において自分自身を見つめ直す「自己」の働き（フロイトの論を参照）、以上のように自らの行動・心情を振り返る働きに着目しようとする場合、「自己」概念を想定することは必要となる。今後は、本研究を踏まえ、オルポートのいうところのプロプリウムに類する概念を基にして人が「自己」もつの働きを発展させていくプロセスや、人が他の人の「自己」を認め、そのプロプリウムをも見出していくプロセスの在り様について考察していきたい。

-
- ¹ 「自己」と「自我」は、例えばフロイト理論において、明確に意味が使い分けられているものの、本論文では両者を明確に区別することなく用いることとする。
- ² 本論文では、フロイトの精神分析学理論における中核概念を取り上げるにあたり、その理論的変遷の展開を明示的に区分することなく取り上げたが、実際には各時期によってフロイトの主たる研究関心・研究の構想は大きく異なる。例えば精神分析学者のトンプソン（1951）による分類を紹介した佐治（1971）によれば、研究の初期に展開されていた「性理論」に代わって、「自我」を中心とする理論が展開され始めたのは、概ね1920年代以降とされている。詳しくは、トンプソンの著作及び佐治の著作を参照。佐治守夫「精神分析」、八木（監修）・末永俊郎（編）、（1971）、講座 心理学 1 歴史と動向、東京大学出版会
- ³ Freud, S., 井村恒郎・小此木啓吾他（訳）、（1970）、Freud 著作集 6—自我論・不安本能論— 人文書院、267 頁
- ⁴ とは言え、フロムが「Freud の理論における個人と社会との関係は、本質的に静的なものである。個人はいつまでも同じままにとどまるものであり、変るようになるのは、社会が自然的な欲求に大きな圧力を及ぼし、そしてそれによって昇華を促進させるか、もっと満足を許して、文化を犠牲にするのかのいずれかの場合だけなのである」と述べていることを踏まえるならば（Fromm, E. (1951). 自由からの逃走、創元社）、フロイトの想定した「自己」概念にはそれ自体が変化する可能性が認められない以上、その主体性は生得的なものにとどまると指摘することもできる。佐治、前掲書、113 頁。
- ⁵ 実際には、ゲシュタルト心理学者たちが実験心理学に認められる要素還元主義に対して批判を行う以前に、アメリカではジェームズ (W. James. 1842-1910) が、イギリスではスタウト (G. F. Stout. 1860-1944) が同様の主張を展開している (Thomson, 1968)。興味深いことに、柿崎によれば、要素還元主義に基づく主張を展開したとして批判を受けるヴントですら、「創造的総合」という原理を提唱する中で、以下のように、心理学的研究を要素への分析のみとみなさない視点が見出される (柿崎、

1971)。

心的複合の性質はその構成要素の性質から理解されるはずであるが、それは決して要素の性質の単純な総和ではない。……統覚によって要素が結合されるときには、各要素の単独に存在する時になかったような新しい意味が生じるのであるが、重要なことは、それが要素には含まれていない新しい心的内容であることである (Wundt, W. (1896) 15. Aufl., 1922). *Grundriss der Psychologie*. Alfred Kroner. (柿崎「ゲシュタルト心理学」. 八木 (監修)・末永俊郎 (編). 前掲書より引用)。

柿崎の述べるところによれば、ゲシュタルト心理学者たちの批判は、「要素としての感覚を局所的な刺激作用だけに依存」するものと見なした点にあったと考えられる。

- ⁶ だが、柿崎 (1971) の述べているところによれば、レヴィンの考え方に対しては、Brunswik によって以下のような批判がなされている。

もし Lewin のいうように生活空間の関数として行動を考えると、その外にある諸条件がどのようにして生活空間の諸事実に影響を及ぼすのか、また、どのようにしてその中に位置づけられるようになるのかということについては、きわめて不明瞭である。…むしろ問題は、その生活空間の外にある客観的諸条件がなんらかの意味で生活空間の諸事実となる仕方を明確に押さえることであって、それができなければ行動の予測や統制は不可能となる (柿崎「ゲシュタルト心理学」. 八木 (監修)・末永俊郎 (編). 前掲書より引用)。

- ⁷ Watson, J. B. (1930). *Behaviorism*. 安田一郎 (訳). (1968). 河出書房新社, 28 頁

- ⁸ 末永 (1971) が「Tolman のシエマを完成させるものとして仲介変数と行動的結果との関連性 (関数 3) を検討しなければならないが、この点について、Tolman の考え方は前の二つの関数ほどに明快ではない。…実験のつどに種々の予測はしているものの、理論的にまとまった見解はあまり見当たらない」と述べているように、実際のところ、トールマンの理論は個々人の行動を予測できるほど完成していたわけではないようである。(末永俊郎「行動主義心理学」. 八木 (監修)・末永俊郎 (編). 前掲書より引用)

- ⁹ Allport, G. W. (1955). *Becoming*. Yale University Press. 豊沢登 (訳). (1959). 人間の形成. 理想社, 89-90 頁
- ¹⁰ 同書, 91 頁
- ¹¹ プロプリウムとは、身体感覚、自己同一性、自我高揚、自我拡大、理性的自我、自己観、自己希求、知る者という八つの領域からなる概念で、個人にとって重要な事柄を扱うものであることが示されている。
- ¹² Allport 前掲書, 138-139 頁
- ¹³ 柏木恵子. (1983). 子どもの「自己」の発達. 東京大学出版会, 15 頁
- ¹⁴ 人間の子どもにおける自己鏡映認知を扱った研究としては、例えば以下のものがあげられる。
百合本仁子. (1981). 「1 歳児における鏡像の自己認知の発達」『教育心理学研究』29 (3) 261-266 頁
- ¹⁵ 柏木, 前掲書, 135 頁
- ¹⁶ 浜田寿美男. (1993). 発達心理学 再考のための序説. ミネルヴァ書房, 232 頁
- ¹⁷ 同書, 291-292 頁
- ¹⁸ 佐治, 前掲書, 102 頁

<参考文献>

- Allport, G. W. (1955). *Becoming*. Yale University Press. 豊沢登 (訳). (1959). 人間の形成. 理想社
- Bandura, A. (1982). The self and mechanism of agency. In J. Suls (Ed.), *Psychological Perspective on the Self*. Lawrence Erlbaum Associates.
- Freud, A. (1936). *Das Ich und Abwehrmechanismen*. Internationaler Psychoanalytischer Verlag. 外林大作 (訳). (1985). 自我と防衛. 誠信書房

- Fromm, E. (1951).** *Escape from freedom.* Rinehalt. 日高六郎 (訳).
(1951). 自由からの逃走. 創元社
- 浜川祥枝・生松敬三・馬場謙一・飯田真 (編). (1978). フロイト精神分析物語
—フロイト思想の実観を描く— 有斐閣ブックス
- 浜田寿美男. (1993). 発達心理学 再考のための序説. ミネルヴァ書房
- Freud, S.** 井村恒郎・小此木啓吾他 (訳). (1970). **Freud 著作集 6—自我論・不安本能論—** 人文書院
- 柏木恵子. (1983). 子どもの「自己」の発達. 東京大学出版会
大山正・岡本夏木・金城辰夫・高橋滯子・福島章. (1977). 心理学のあゆみ.
有斐閣新書
- Thomson, R. (1968).** *The Perican History of Psychology.* Penguin
Books. 北村晴朗 (監訳). 北望社
- 上山安敏. (1989). フロイトとユング 岩波書店
八木 (監修)・末永俊郎 (編). (1971). 講座 心理学 1 歴史と動向. 東京大
学出版会
- Watson, J. B. (1930).** *Behaviorism.* W. W. Norton & Company. 安田一
郎 (訳). (1968). 河出書房新社
- 百合本仁子. (1981). 「1 歳児における鏡像の自己認知の発達」『教育心理学研
究』29 (3) 261-266 頁

